

# 6, 解説板の設置について

## 犀川大橋の解説板の設置について

犀川大橋の歴史的な価値を市民の方々に再認識していただくため、「登録有形文化財」であることを示す「解説板」の設置について検討を進めています。

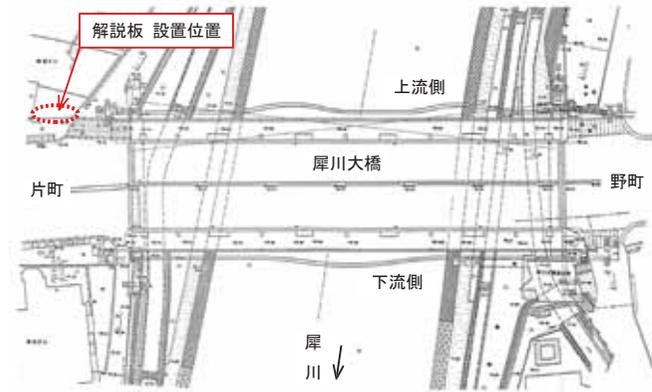
設置候補地は下図に示す場所とし、下記の条件および方針に基づき、右図に示す比較案を作成しました。

### ●基本条件

- ・歴史的価値のある橋梁に関する解説板であること。
- ・設置候補地の広さから、横幅 1m 程度のものとする。
- ・積雪地であること考慮する（耐久性の良いものとする）。
- ・周辺の道路付属物（信号機、標識支柱等）の色彩（こげ茶色）との整合を図る。
- ・一方通行出口であることから、交差点視距を確保できる位置に配置する。
- ・設置向きに配慮（1つの案として、橋を眺めながら解説板を見る）

### ●基本方針

- ・橋と解説板を交互に眺めやすい（見比べることができる）位置に配置する。
- ・周辺との調和を阻害しないシンプルな形状とする。
- ・橋のイメージに即した鉄製のもの（木・石→橋のイメージにそぐわない）
- ・角柱のもの
- ・周辺の道路付属物の彩色との整合を考慮した「こげ茶色」を基本とする。



### ●盤面のデザイン

盤面のデザインについては、登録有形文化財としての犀川大橋の紹介することを念頭に、下記に示すように、その「歴史」や「補修歴と色彩の変遷」、「橋の諸元」により構成します。なお、実際の盤面の大きさは 1m × 1m 程度、文字の大きさは 1cm 程度としています。

## 登録有形文化財 犀川大橋

### ■ 犀川大橋の歴史

**木橋時代** 1954年(文禄3年)～1918年(大正7年)

文禄3年(1594年)加賀藩祖・前田利家により犀川大橋は架けられた。延宝金沢御(御近所御前)によれば、当時の大橋の長さは40間、幅も間であり、橋下側の大橋きであったという。木造の大橋は、洪水はんらのたひに流されたり損傷をうけた。緊急の場合を除き農作業を妨げないためと、資調の便に備えるため秋の収穫の後に修理を行った。また、大雨洪水で流されるたびに設けられる仮橋として舟橋をかけることが多く、橋の下流に舟を浮かべ、鎖を渡れ大綱やガスワイで結び、水の増減に応じて伸縮自在とした。

幕末の天候期は凶作が続き、天保8年(1837年)慶主は天保御入で困っているもの救済のため、舟みかけ大橋の架け替えに取りかかり、これに従事せ職を得させた。

**鉄筋コンクリート時代** 1919年(大正8年)～1922年(大正11年)

大正8年(1919年)に完成した犀川大橋は橋脚の多い鉄筋コンクリート製で、とてもがっちりとしたものであった。この橋は、それまで片町止まりだった市内電車をさらに野町方面まで延長するため、それ以前の木橋を取り壊し、一年余りかけて完成したものであった。

フランス・アンネビック式鉄筋コンクリート T 形 6 径間橋で、橋長 32 間、幅 8 間(軌道併用)であった。鉄筋は日本の八幡製鉄(現新日鉄)製であるが、一部は米国製でもあった。

この最初の原型なる永久橋も、大正 11 年 8 月の金沢開港所(現気象台)開設以来の集中豪雨で、上流の大変橋、上舟橋、仮橋が流失し、橋材・流木等でせきあげられたため、不幸にして落橋の悲運にあった。

### ■ 補修歴と色彩の変遷

1924(大正13)年: 竣工(当時「ネズミ色」との文献記載あり)

1957(昭和32)年: 橋桁11本補修、床版補修

1958(昭和33)年: 石川県から建設省に管理を移管

1966(昭和41)年: 塗装(薄いカーキ色)

1967(昭和42)年: 軌道撤去、オーバレイ、モルタルによる床版補修

1968(昭和43)年: 載荷試験

1973(昭和48)年: 塗装(自家クリーム色) 下写真【 1 】

1976(昭和51)年: 河川改修に伴う橋台補修

1978(昭和53)年: 橋桁・排水槽取替、床版部分交換、下橋脚ガセット部分取替

1984(昭和59)年: 塗装(青緑色) 下写真【 2 】

職員誌録、観音軒ジャンクション-修繕、伸縮継手取替

1988(平成元)年: 金沢市養老亭側にて建築物彩色に調整することとなる  
犀川およびその周辺地区は「伝統的景観保存区域、周辺の自然・街並みに配慮すること」を掲げる片町・野町は「近代的都市景観計画区域、茶・緑の建築へ基本的に指導

1993(平成05)年: 塗装(青灰色系グラデーシオン) 下写真【 3 】

歩道部改修、垂直行・橋脚部補修、伸縮継手取替

1994(平成06)年: 橋脚交換、パラベット塗装、照明灯取替

2000(平成12)年: 国の登録有形文化財に指定

写真【 1 】

写真【 2 】

写真【 3 】

### ■ 橋の諸元

種別	一般国道
竣工年	大正13年(1924年)
橋長	623.00m
矢高	60.00m
幅員	21.00m
床版幅員	12.00m
床版厚	1,500mm × 4,000mm × 2.00m
設計者	内閣府 土木部 建築課 橋脚課 橋脚課 橋脚課 橋脚課
上部構造	下流式鋼筋コンクリート橋
下部構造	140.00m
主桁間隔	9.75m
橋脚形式	橋脚
橋脚数	8本
橋脚形式	単式片コンクリート橋脚
橋脚高さ	10.00m
橋脚基礎	直接基礎

**登録有形文化財**  
平成12年(2000年)に犀川大橋は、国土の歴史的景観に寄与しているものとして登録有形文化財に指定された。

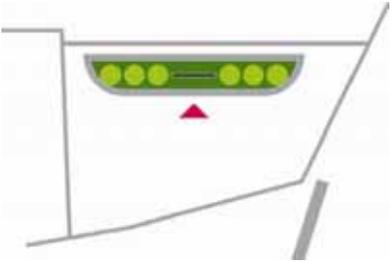
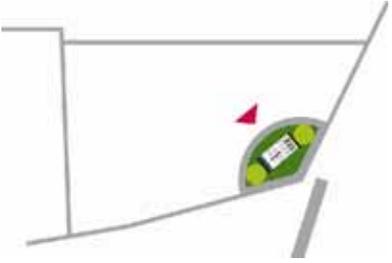
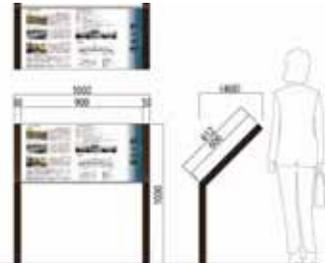
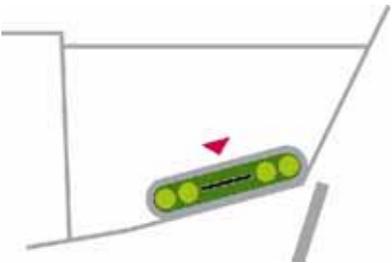
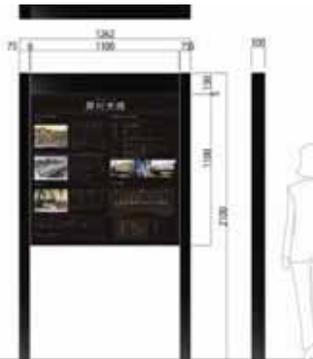
登録有形文化財  
平成12年(2000年)に犀川大橋は、国土の歴史的景観に寄与しているものとして登録有形文化財に指定された。

登録有形文化財  
平成12年(2000年)に犀川大橋は、国土の歴史的景観に寄与しているものとして登録有形文化財に指定された。

登録有形文化財  
平成12年(2000年)に犀川大橋は、国土の歴史的景観に寄与しているものとして登録有形文化財に指定された。

●解説板の配置・形状等

解説板の設置位置や形状等については、いくつかのバリエーションが考えられます。以下にその組み合わせによる比較案1～3を作成しました。

	平面配置	姿 図	設置イメージ	特徴等
第1案 板状タイプ			 ※設置位置は第3案と同等とすることも可能	<ul style="list-style-type: none"> <li>・薄くシンプルな形状ながら重厚感の漂う、景観との相性もよいデザイン。</li> <li>・高さがあるため視界を遮り、限られた空間では圧迫感を与える。</li> <li>・アルミ押出形材を用いた継ぎはぎが無くボルトを見せない造形は高い意匠性があるがコスト高になる。</li> </ul>
第2案 斜板タイプ				<ul style="list-style-type: none"> <li>・本体表示基板を傾斜とすることで橋と解説板とを交互に眺め易い。</li> <li>・本体高さを比較的低く抑えることができる。</li> <li>・奥行き方向に空間を取るため、限られた空間では奥行き方向に制約が出る。</li> <li>・鋼材等を用いたシンプルな構造によりコストを抑えている。</li> </ul>
第3案 門型タイプ			 ※設置位置は第1案と同等とすることも可能	<ul style="list-style-type: none"> <li>・定番デザインであらゆる空間にマッチする。</li> <li>・高さがある為視界を遮り、限られた空間では圧迫感を与える。</li> <li>・アルミ押出形材を用いた継ぎはぎが無くボルトを見せない造形は高い意匠性があるがコスト高になる。</li> </ul>